

位置関係によって表現している。水利関係絵図類には、大和川付替以前及び以後の村々の用水系統を表現している図のほか、溜池に関する絵図がきわめて多く含まれており、この地域における溜池の重要性を物語っている。絵図には一つの溜池が数ヶ村によって領有される状況などが描かれている。これらは、溜池や水路をめぐる争論の後で作成されたものが多い。

以上、主に収載絵図について述べてきたが、本書は単なる絵図集成にとどまらない。近世絵図以外に市域の景観とその変遷を物語る資料として、年次の異なる地形図や空中写真(第7章)、編者らが作成、修正した主題図等が多数含まれているのである。

主題図としては、古代の条里分布、近世の所領配置と石高分布、明治以降の土地利用の変遷、地形分類図、土地条件図などが収められ、市域の自然的・歴史的な背景を理解するための助けとなっているが、特に注目すべき収録図は地籍集成図(第5章)である。本図は、明治初期に作成された総計530面にも及ぶ市域の字切図から得られる小字名や小字界、一筆ごとの境界、地目といった情報を、多色を用いて5千分の1地図上に復原したものである。その収録により、失われつつある当時の地割形態や溜池の所在、小地名を将来に伝える貴重な資料が身近なものとなった。地籍図等の散逸が進む中で、このような試みは大いに歓迎されよう。

当地域は、古墳、条里、溜池など豊富な歴史的景観に恵まれ、条里地割と耕地・集落形態との関係、溜池や水路をめぐる村落間の争論、河川付替に伴う景観や空間組織の変化といった興味深い題材に事欠かない、歴史地理学研究にとって格好のフィールドである。それ故、本書のような資料集が刊行されたことはきわめて意義のあることであり、逆にこういう土地柄だからこそ、本書は刊行されたのだともいえよう。そのことは、さきに隣接する羽曳野市において、類書である『羽曳野市史 史料編別巻 古絵図・地理図』(1985)が刊行されていることからもうかがえる。

自治体史の資料編やその調査報告書において、地誌(地理)なるタイトルで一章あるいは一巻が編集される例もよく見られる。しかし、それらの内容は、近世や明治初期の郡村別地誌書など文献資料を収録したにすぎないものが多く、絵図資料については景観への関心は概して低い。その点から考えても、絵図

資料を中心に主題図や地形図、空中写真までも収め、地域の景観とその変遷をたどることを目的とした本書が地理編として刊行されたことは、自治体史編纂の歴史の上で注目すべきことであろう。今後は、絵図にとどまらない視覚的な資料と文献資料とを調和させた、真の意味での地理編の刊行が期待される。事実、史料に恵まれた愛知県内のいくつかの市町村では、近世村絵図を柱にしたそのような資料集が刊行されている。

歴史といった場合、文献資料の比重が高くなるのは当然である。自治体史編纂や地域博物館の活動に対する歴史地理学研究者の積極的な関与により、絵図・地図資料が広く活かされるようになることを期待したい。特に、東日本において、そのような動きが活発化することを強く願う次第である。

(佐藤 直行)

韓国文化歴史地理学会 編：
『韓国の伝統地理思想』(韓文)

民音社 1991年5月

A5判 334ページ 7,000ウォン

最近、日本の学術雑誌においても、韓国に関する研究論文や報告などが多くみられるようになった。日本の研究者に隣国を理解していただくため、また学問的交流を持続していくためにも、たいへん喜ばしいことであろう。

ところで、一昨年『歴史地理学』(第151号)の文献紹介において、韓国の『文化歴史地理』(創刊号)の紹介とともに、韓国文化歴史地理研究会が日本の読者に紹介されたことを覚えている。この研究会が、1991年から正式学会として発足し、機関誌とは別に出版された第1冊目の労作が、この『韓国の伝統地理思想』である。

本書は、「はしがき」において執筆者の一人であり現在同学会会長である李燦氏が述べているように、韓国の有数企業の一つである「大宇」財団から支援を受けながら、1987年以降「韓国伝統地理学連続講座」において発表された論文の中から抜粋し、編集したものである。

本書の内容構成は、以下のよう、10編の研究論文からなる。

「朝鮮実学知識人の漢訳西学地理書理解—西欧地理学に関する啓蒙の開眼—」(李 元淳)

「茶山丁若鏞の地理思想」(任 徳淳)

「韓国風水思想の理解のために」(崔 昌祚)

「朝鮮時代の地図冊」(李 燦)

「開港までに外国で出版された朝鮮図」(韓 相復)

「韓国の気候と文化」(金 蓮玉)

「儒教的村落景観の理解」(金 徳鉉)

「朝鮮時代のソウルの交通手段と交通路」(李 恩淑)

「朝鮮時代のコンソ湾の水産業と漁村」(金 日基)

「泰安半島の氏族集団と村落の形成」(李 文鍾)

以上の執筆者の構成をみると、10人のうち、2人(李元淳・韓相復)を除けば、いずれも韓国の歴史・文化地理を専門とする、現在第一線で活躍している研究者である。専門を異にする2人のうち、李元淳氏は執筆当時国立ソウル大学校師範大学学長(韓国では日本の大学に相当するものを大学校と呼び、日本の学部に相当するものを大学と称している)の職についており、歴史学が専門である。韓相復氏は物理学が専門で、自然環境研究院院長の職にある。この2人が参加したきっかけは、筆者自身の専門分野と密接な関係があり、また平素からの興味の延長線だと、評者は聞いている。

以下では、各論文の内容を執筆順序によって、簡単に紹介することにした。

李元淳氏の「朝鮮実学知識人の漢訳西学地理書理解—西欧地理学に関する啓蒙の開眼—」は、朝鮮時代後期に普及していた漢訳世界地図および漢訳西学地理書が、当時の知識人(主に実学者を意味する)の間にどのような影響を与えたかについて論じたものである。筆者は、朝鮮時代後期における伝統地理の認識を大きく変化した要因として、漢訳世界地図と漢訳西学地理書を強調する。そして、当時実学者に読まれていた世界地図6編と地理書16編の内容を基に、実学者たちにどのような影響を与えたか、またその結果、実学者たちは多くの西洋地理知識をどのように解釈し、受容したのかを明確にしている。なかでも、当時の著名な実学者である李陞光、李瀛、慎後聃、そして北学論者たち(例えば洪大容、朴趾源、朴齊家など)の例をあげており、当時の新しい西欧知識は、単純に啓蒙的受容にとどまり、朝鮮時代後期における歴史の流れを一変させるまでには至らなかったと指摘している。

「茶山丁若鏞の地理思想」においては、李朝後期

実学思想の集大成者である丁若鏞(1762~1836)および彼の業績に対し、地理学的立場から考察を行なっている。筆者は、茶山の多くの論著の中から「地理的」なものを19冊掲げ、それぞれの論著に対して、茶山の地理思想と学問的姿勢の点から詳細な分析を加えている。

「韓国風水思想の理解のために」は、タイトルからも分かるように、複雑でかつ膨大な風水地理説について、もっとも基本的な概念や論理構造を分かりやすく紹介したものである。筆者の崔昌祚氏は、長年にわたり、この伝統的風水思想の研究を深めたいと、すでに多くの論文や著書をまとめている。氏によると、「風水」は大きく2つの体系から構成されるという。第1は経験科学的論理体系で、さらにこれには看龍法、藏風法、得水法、定穴法、坐向論の5つの思想が存在する。第2は気感応的認識体系で、このなかには同気感応論、所主吉凶論そして形局論の思想が分かれて存在している。本論文においては、この8つの思想が筆者の独特な論理展開により紹介されている。この点から、本論文は風水地理思想の一断面を学ぶのに便利である。

「朝鮮時代の地図冊」は、李燦氏が多年にわたり収集した20余りの地図冊や、各大学図書館・博物館に所蔵されている地図類を利用し、朝鮮時代に多くみられる「道別府郡邑図集」「輿地図」および「天下図」という書名がついている地図冊を中心に、その類型、起源、それぞれの内容の整理・分析を行なったものである。とくに、文中に5点の写真が、また論文最後の14ページにわたって14点の写真がつけられており、読者には、李朝時代の地図冊の性格を把握するうえでよい史料となる。論述の中では、輿地図冊についての説明が詳しい。

「開港までに外国で出版された朝鮮図」においては、朝鮮半島の開港(1875)以前に外国において発行された朝鮮地図(海図を含む)の中で、とくに朝鮮半島が独立的な形態を示すもの——中国大陆とつながっていない形の——を重点的に取り上げ、主に地図の出版先、作成者、特徴などを解説形式でまとめている。地図類は、年代順に36点を取り上げており、なかにはかつて日本および日本人によって作成された9点についての紹介もみられる。

「韓国の気候と文化」は、韓国気候学の第一人者ともいべき金蓮玉氏の論文である。筆者は、韓国の気候の特性として、①明確な四季の変化、②暑さ

と寒さ、③夏季に多い降雨、④頻繁な洪水と日照り、⑤季節風とさまざまな地方風の5つをあげたうえ、これらの気候の変化が、韓国の衣食住文化とどのように関連し、また、どのように対応してきたかを詳細に述べている。さらに、気候と関連する民俗語彙や歳時風俗・地名などを、極めて細かく、しかもユニークな着想から分析している。なかでも、気候に関わる諺、歳時風俗などに関する記述からは、今日の韓国社会を違った観点からとらえる発想を得ることができるであろう。この点、読者に興味をもたせるに充分と思われる。

「儒教的村落景観の理解」では、「景観」の一部分として理解すべき儒教的村落を、現代的視点から解釈し、地理学的立場からは、どのような意味をもたせられるかが検討されている。とくに、儒教的村落を構成するものに類型的性格や場所的性格による解釈を施し、文化景観の一要素として強調している。さらに、今日もっとも儒教的文化地域として存在している「安東」（慶尚北道）を例として、儒教文化の定着やその自然・空間観について論述している。

「朝鮮時代のソウルの交通手段と交通路」において、李恩淑氏は、伝統的な交通手段と交通路を大きく陸上交通と海上交通とに区分し、朝鮮の開港期以前および開港期以降の時代別変遷過程について、ソウルの事例から解明を試みている。厳選した史料に基づき分析が目を引く。

「朝鮮時代のコンソ湾の水産業と漁村」は、金日基氏が長年にわたり研究した成果である博士論文（ソウル大学校）の一部である。この学位論文は、朝鮮時代の前近代的な漁具、漁労法、漁獲物の加工、製塩などを、史料と厳密な現地調査によって復原しており、韓国国内での評判も高い。コンソ湾は、朝鮮時代から有名な朝鮮最大のイシモチの産地であり、国内の七山漁場（全羅北道の黄海側）に属する。本稿においては、現地調査により復原された漁具、漁船、塩生産道具などが紹介され、印象的である。また、コンソ湾沿岸地域の村落に漁業機能が強化されたのは17～18世紀頃であると推定したうえで、その機能に基づき4つの村落類型を設定している。そして、コンソ湾の漁業と漁村発達に大きな影響を及ぼした要因として、海洋環境、漁労および貯蔵技術、水産物の流通構造を指摘している。

「泰安半島の氏族集団と村落の形成」は、韓国の伝統的な村落の一つである同族村を取り上げ、泰安

半島（忠清南道西側）の事例により、氏族集団の形成や分化という側面から論じている。そのなかで、筆者は同族村をなす基本的条件の「土姓」（筆者によると、土は地域的共同体を、姓は血縁的氏族集団を意味するという）に着目し、特定氏族が最初どのような地域に住みつき、その氏族が人口の再生産過程のなかで、いかにして空間的拡散をとげていくのかを明解にとらえている。

以上、各論文ごとに説明してきたが、ここで評者の感想や意見を若干述べることにしたい。全体的構成からみると、時代選定（朝鮮時代あるいは朝鮮時代を背景にしたものが、10編のうち7編）に多少かたよった感じがする。論文のなかには、各著者の研究領域による独特な論理の展開のせいも、一般の読者には理解できない部分もあると思われる。また、本書全体の内容の流れを把握するのに、多少戸惑いが生じるかもしれない。つまり、「韓国の伝統地理思想」という本書の大枠の中で、それぞれの論文は互いにどのような関連性をもつのか、もし関連性のないものとするならば、それぞれの論文の中で、とくにどの部分に伝統的な地理思想が盛り込まれているのであろうかという、素朴な疑問が生まれる。このような疑問が生じる理由としては、本書が目次構成の段階において、章立てを導入せず処理したこともあげられるが、それよりはタイトル自体がいわゆる「伝統地理思想」という幅広いテーマを前面に掲げただけに、限られた原稿だけでは単行本の内容構成がかなり難しかったからであろう。

いずれにせよ、「韓国伝統地理学講座」が開かれて、早くも評価される段階に至ったことは、一方では、それだけ急成長をみせたことにもなるであろう。この点においては、地理学研究を進めている評者にとっても、うれしい限りである。

日本の読者には、まず言語のカベが存在し、またそのカベを越えた者でも、韓国の歴史や今日の社会的背景を知らないと、なかなか理解できないところもあると考えられる。しかし、それはそれでよいのではないだろうか。わからないところがあるからこそ、勉学に臨む意味があるものと、評者は信じている。ぜひ、勇気をもって一読していただきたい。

（鄭光中）